

# ホメーロスの声

生 田 康 夫

## プロローグ

『イーリアス』第9歌にこういう場面がある。アカイア勢第一の勇士アキレウスが、総大将アガメムノンへの怒りから戦線離脱をしている。そのアキレウスのもとに、和解使節としてオデュッセウスたちがやってくるくだりである。

「彼らは、ミュルミドネス軍の陣屋と船のところにやってきて  
音高き琴で心楽しんでいる彼（アキレウス）を見つけた、  
それは、美しく細工が施され、銀の琴柱が付いた琴で  
彼がエーエティオンの都を滅ぼした時に戦利品の中から得たものだった。  
それで心楽しみつつものふ共の武勲を歌っていた。

パトロクロスは一人静かに彼に向き合って座っていた」(9-185～190)

激情型の猛者アキレウスが怒りに身をまかせながらも詩を歌っているという、印象深い場面だ。これは英雄詩篇が口頭詩であったことの最初の証言だが、『イーリアス』を口に出して読んだりそれを聞いたりすると、そのたびにこの詩篇はやはり口頭詩だとの思いを新たにす。

明治学院大学言語文化研究所の「ホメーロス輪読会」では毎回数十行の原詩の朗読と解釈を続けている。そこで原詩の音に耳を傾けていると、数ある名場面に限らず、翻訳してしまえば変哲のない動きや会話、情景などの詩行が、しばしばにわかに生動し魅力を増すことに気付くのである。時として、ホメーロスの声を耳にしているような錯覚に陥ることさえある。

この生動の秘密はなになのか、魅力の鍵はどこにあるのかさぐっているのだが、ホメーロスの詩は、行雲流水、天衣無縫、その措辞はまことに自然で技巧の跡をほとんどとどめていない。

ただひとつのことに気がつく。それは、ある詩行に特徴的な主調音があり、そ

れがその詩行の語る意味内容と響き合い、口に快く耳に快い詩句が成り立っていることがあることだ。そのようなときには、音と意味との間で幸福な相互作用が起き、主調音は詩行の語る意味内容の印象を深め、意味内容は主調音がその内に蔵していた意味合いを引き出すのである。その主調音は、母音であることもあり子音であることもあり一連の音であることもある。主調音と意味が響き合うのは一行とは限らない、数行にわたる場合あれば逆に半行の場合もある。

今日詩は文字で記されているが、もともと音を離れて詩はない。そして詩の音とはつまるところ詩人の声だともいえる。口頭、口承詩であるホメーロスの詩の場合にはなおさらそうだ。であるならばホメーロスの詩は、それがホメーロスの声を想起させる時、はじめて本来の面目をあらわすのだろう。

音と意味の共鳴、ここにホメーロスの声の一端を聞くことができるかどうか、以下、『イーリアス』の中で出会うそのような詩行を読みつつその音に耳を傾けてみたい。

### 『イーリアス』における音と意味

『イーリアス』の冒頭は詩の女神への呼びかけから始まっている。その一節（第1行から7行目まで）の終わり二行はこうなっている。

「二人がはじめに争って袂を分かったその次第から（歌い給え）、  
人々の王アトレウスの子と神の如きアキレウスの二人が。」  
(第1歌-6~7行)

ἐξ οὗ δὴ τὰ πρῶτα διαστήτην ἐρίσαντε  
Ἀτρεΐδης τε ἀναξάνδρων καὶ δῖος Ἀχιλλεύς.

δ (d音) と τ (t音) の繰り返し、その切迫した調子は序曲において連打される打楽器の音調というべく、内容と音調が一つになって叙事詩の開幕を告げている。

少し先には、怒ったアポロン神がアカイア勢に弓矢を射注ぐ場面がある。

「恐ろしい音が起こった、白銀の弓から」(1-49)

δεινὴ δὲ κλαγγὴ γένηετ' ἀργυρέοιο βιῶιο

この行前半の濁音 δ (d)、γ (g) からは弓を放った瞬間の音、後半の oio からはその残響が聞こえてくる。

アポロン神の怒りの原因を問われた占師カルカスが、総大将アガメムノンの行為にその原因があると答える。それに対するアガメムノンの反応を語る詩行はこうである。

「真っ先にカルカスを悪意を含んで睨みつけつつ（アガメムノン）は言った」  
(1-105)

Κάλαχαντα πρώτιστα κάκ' ὀσσόμενος προσέειπε  
κα (ka) とか χα (kha) とかのカ行音の繰り返しからは、傲慢な総大将のいかにも憎々しげな口調が浮かぶ。口調にとどまらず、苦々しさを囁みしめ歯軋りする表情まで浮かんできそうだ。

「翳深い山々と轟きわたる海とが」(1-157)

οὐρεᾶ τε σκιοέντα θάλασσα τε ἠχέεσσα  
開かれた a 音の繰り返しが遙か彼方に離れている感を深める。

「鞘から大剣を抜かんとしたとき、アテーネーが来た  
空から、腕白き女神ヘーレーが遣わしたのだ」(1-194~5)

ἔλκετο δ' ἐκ κολεοῖο μέγα ξίφος, ἦλθε δ' Ἀθήνη  
οὐρανόθεν: πρὸ γὰρ ἦκε θεᾶ λευκώλενος Ἥρη  
1 行目途中まで k 音の連続による緊張の高まりが感ぜられ、μέγα ξίφος (mega ksiphos 大剣) の ga と ksi の接点で最高潮に達する。その直後一転、長音の ê や â による宥めの調子に移っている。アテーネーはアキレウスの怒りを宥めに来たのである。

「彼らは帆柱を立て、白い帆を張り渡した、  
風が帆の真ん中を膨らませた、沸き立つ波は  
舳先の両側で大きく叫んだ、船の進むにつれて」(1-480~2)

οἱ δ' ίστον στήσαντ' ἀνά θ' ίστια λευκὰ πέτασσαν,  
ἐν δ' ἄνεμος πρήσεν μέσον ίστιον, ἀμφὶ δὲ κῦμα  
στείρη πορφύρεον μεγάλ' ἴαχε νηὸς ιούσης:  
στ (st) の音の繰り返しは、それ以外の σ、ς (s 音) と相俟って、航行する船の快いスピード感を醸す。

「どよめきとともに（兵士たちは殺到した）、あたかもざわめき立つ海の波が  
広大な浜に轟き、海原が響き渡るように」(2-209~210)

ἠχῆ, ὡς ὅτε κῦμα πολυφλοίσβοιο θαλάσσης  
αιγιαλῶ μεγάλῳ βρέμεται, σμαραγεῖ δέ τε πόντος.  
πολυφλοίσβοιο (poluphloisboio ざわめき立つ)、βρέμεται (bremetai 轟く)、σμαραγεῖ (smaragei 響きわたる)、いずれも訳語をつけはしたがほとんど無用という気さえする。それぞれ語の音自体が意味を雄弁に語っている。

『イーリアス』はこのような喚起力に富んだ擬音語（あるいは擬音的效果を発揮する語）で葺めき合っている。ホメーロスの肉声を垣間見るよすがになるかと思われるので、その内特に耳に響くものを挙げてみることにする。引用箇所表示は省略するが、いずれも『イーリアス』中に出てくるままの形で示す。仮に訳語を付したのものもとより参考すぎない。訳語の前のかっこ内は引用箇所の状況の補足である。

ἄγνυτον	agnyuton (枝を) 折る
ἀποβλύζων	apoblyuzôn (赤ん坊が飲み物を) 吐き出す
βαμβαινών	bambainôn (膝が) わなわな震える
βέβρυχεν	bebryûkhen (大波が) 咆哮する
βόμβησε	bonbêse (兜が地に落ちて) ボーンと音を立てる
κλάζοντε	klazonte (驚が) 叫ぶ
κελάρυζει	kelaryuzei (水が) 進む
λάκε	lake (青銅の武具同士がぶつかって) カラカラ音を立てる
λίγξε	linkse (弓が矢を放って) ビュンと鳴る
μορμύρων	mormyûrôn (流れが泡を立てて) ブクブク鳴る
τετρίγει	tetrîgei (背中中の筋肉が) 軋む

以上は動詞であるが、名詞にもいろいろある。

ἄραβος	arabos (歯が) ガチガチいう音
δοῦπος	dûpos (城門を壊す) 鈍い音
ἤχη	êkhê (軍勢から沸き起こる) 喚声
καναχήν	kanakhên (兜が矢に射られる) カーンという音
κόμπος	kompos (イノシシの牙の) 軋り音
κτύπος	ktyupos (馬の蹄の) カツカツいう音
ὄρυμαγδὸν	oryumagdon (大波が木も石も巻き込んで出す) 轟音
πάταγος	patagos (枝の折れる) バキバキいう音
χρόμαδος	khromados (組み合った闘士の顎から発する) 歯噛みの音

他にもまだまだあって、この詩篇はさながら擬音語辞典の様相を呈している。そしていずれの語も、意味を確認すると成程と思われ、その喚起力は驚くばかりだ。

ところで逆の音のない静かな状態はどういわれているかという、σιωπή (siôpê 静かに) がよく出てくる。これもさもありなんであり、s音といい後に続く長音といい、逆説的になるが静まりの擬音的表現だ。

そしてホメーロスの詩はこれら単語レベルの擬音にとどまらず、詩句レベル詩行レベルで広義のオノマトペ的表現を随所で成し、それが音と意味の共鳴をもたらしていると言えそうだ。

「(鳥の群は) そこかしこに翼に誇りつつ羽ばたき

鳴き叫びつつ地面に降り立てば、草原は響き渡る」(2-462~3)

ἐνθα καὶ ἐνθα ποτῶνται ἀγαλλόμενα πετερόγεσσι  
κλαγγηδὸν προκαθιζόντων, σμαραγεῖ δέ τε λειμών,  
この γα (ga)、γε (ge)、γη (gê) の繰り返しは呼びかわす鳥の鳴き声そのものだ。

「乳が桶を濡らす春の季節に」(2-471)

ῶρη ἐν εἰαρινῇ ὅτε τε γλάγος ἄγγεα δεύει,  
この詩行の γ (g) 音は流音の ρ (r)、λ (l) と相俟って乳を「ゴクリ」と飲む  
ときの咽喉の音に聞こえる。

「蓮華や沼地に生える芹を食みながら」(2-776)

λωτὸν ἐρεπτόμενοι ἐλεόθρεπτόν τε σέλινον  
ここの流音 (l, r) は戦いを離れた情景の穏やかさを表しているようだ。

ヘクトールが戦いに戻込みする弟パリスを叱りつけることばの中に次の一節がある。

「お前などは生まれても来ず、娶ることもなく死ぬべきだったのだ」(3-40)

αἰθ' ὄφελος ἄγονός τ' ἔμεναι ἄγαμός τ' ἀπολέσθαι:  
行頭・行末の ai の同音反復、そして agonos/agamos の類音反復にことわざ、  
金言の気味がある。それが叱責の調子を強める。

更に叱責は続く。

「お前の親への、祖国への、国民皆への災難を（お前はもたらした）」(3-50)

πατρι τε σῶ μέγα πῆμα πόληϊ τε παντί τε δήμω,  
ここの p 音反復は、罵り口調、唾も飛ばしかねない口調だ。

「(蝉たちは) 樹木に止まって百合の如き声を放っている」(3-152)

δενδρέω ἐφεζόμενοι ὅπα λειριόεσσαν ἰεῖσι:  
λειριόεσσαν (leirioessan) の語義については「百合の如き」とする説と百合と  
は無関係とする説がある。いずれにせよ、よく通る妙音であることはなによりも  
λειριόεσσαν の音が体現している。(呉訳では「嚙喰たる」としており、これは  
原音を再現した名訳だ。ただ「百合の如き」における聴覚・視覚の共感覚も捨て  
がたく、また百合が r 音をふくんでいることもあり上記訳では「百合の如き」と  
した)

「(剣は) 三つに、四つに折れて手から落ちた」(3-363)

τριχθὰ τε καὶ τετραχθὰ διατρυφὲν ἔκπεσε χειρός

繰り返されるタ行音 (t、th) は、刃が折れる音のようでもあり、折れて飛び散る破片の聴覚的イメージのようでもある。

「(ゼウスが) そう言うと、アテーネーとヘーレーはぶつぶつ呟いた。」(4-20)

ὤς ἔφαθ', αἱ δ' ἐπέμυξαν Ἀθηναίη τε καὶ Ἥρη:

この ἐπέμυξαν (epemyksan) という語は「呟いた」という意味だが、その音はいかにもその感じが出ている。myuksan は口を尖がらせて不満げにぶつぶつ呟く感じである。むしろこの語自体が詩人の独創というわけではなからうが、ギリシア語の持つ特質を最高度に引き出すのは詩人の腕である。

弓が野山羊の角から作られたことをいい、その角がどのようなものであったかをこう表現する。

「その角は頭から十六束もの長さに生えていたのだ」(4-109)

τοῦ κέρα ἐκ κεφαλῆς ἐκκαίδεκάδωρα πεφύκει:

k 音は堅い角の質感だ。

「血を吸い出しその上に痛みを和らげる薬を巧みに  
塗った、それはケイローンが彼の父に好意からくれたものである」  
(4-218~9)

αἷμ' ἐκμυζήσας ἐπ' ἄρ' ἤπια φάρμακα εἰδὼς  
πᾶσσε, τὰ οἱ ποτε πατρὶ φίλα φρονέων πόρε Χείρων.

癒しを感じさせる p 音、ph 音である。

「そしてお前、奸智に長けたざる賢い者よ」(4-339)

καὶ σύ, κακοῖσι δόλοισι κεκασμένη κερδαλεόφρον

ここでもまた k 音が非難詰問の調子を体現している。

「あたかも、ざわめく岸辺に海の波が  
吹きつける西風のもとで次々と起こる、  
海で先ず頭をもたげ、そして  
陸に碎けて大きく轟く、岩礁の周りでは  
弧になって波がしらを挙げ、潮の泡を吐く (そのように)」(4-422~6)

ὡς δ' ὄτ' ἐν αἰγιαλῷ πολυηχεῖ κῦμα θαλάσσης  
ὄρνυτ' ἐπασσύτερον Ζεφύρου ὑπο κινήσαντος:  
πόντω μὲν τε πρῶτα κορύσσεται, αὐτὰρ ἔπειτα  
χέρσω ῥηγνύμενον μεγάλα βρέμει, ἀμφὶ δέ τ' ἄκρας  
κυρτὸν ἐὸν κορυφούται, ἀποπτύει δ' ἄλως ἀχνην:

繰り返される υ (y 音) は、いたるところで、湧き上がりあるいは吐き出される泡のようだ。

「鼠蹊部を突いた、死体を向こうへ引いていこうとしているところを」(4-492)

βεβλήκει βουβῶνα, νέκυν ἐτέρωσ' ἐρύοντα:

動き = βεβλήκει (beblēkei 突いた) とその動きの対象物 = βουβῶνα (búbōna 鼠蹊部) の間の音調の類似にはある種の宿命が感じられる。

「まっすぐに骨の下膀胱にまで切っ先は達した」(5-67)

ἀντικρὺ κατὰ κύστιν ὑπ' ὀστέον ἤλυθ' ἀκωκῆ:

ここの k 音は鋭さ(切っ先の鋭さと痛みの鋭さ)を強調している。他の詩行では k 音は憎しみや非難の調子を強めていることが多いのだが、ここは鋭さだ。一つの音が常にある同一の調子を帯びているわけではない。そこには音調と意味の相互作用がある。音にはいくつかの可能性があり、ある詩行で帯びる音の調子はその詩行の意味文脈によって引き出されるのだろう。

第6歌ではヘクトールと妻アンドロマケーとの最後の別れが歌われる。ヘクトールは今度赴く戦いから再び生きて帰れないものと予感している。その痛切で気高い場面で二つの「笑い」が叙されている。

一つは、その場面の最初、ヘクトールが市の門のところでアンドロマケーと我が子に出会った時である。

「さてその時、彼は子供に見入り静かに頬笑んだ」(6-404)

ἦτοι ὁ μὲν μείδησεν ἰδὼν ἐς παῖδα σιωπῆ:

もう一つは、アンドロマケーとことばを交わした後、ヘクトールが子供を抱こうとし頑是ない子供がヘクトールの兜の頂きに揺れる飾りに怯えそっくりかえって泣き叫ぶ、その時である。

「そこで愛しい父親も奥方なる母親も笑い崩れた」(6-471)

ἐκ δ' ἐγέλασσε πατὴρ τε φίλος καὶ πότνια μήτηρ:

μείδησεν (meidēsēn ほほ笑んだ) と ἐγέλασσε (egelasse 笑い崩れた)、いずれも笑いではあるが、前者は σιωπῆ (siôpê 静かに) と形容されているようにほとんど声を立てない笑い、頬笑みだ。後者は ἐκ (ek 外へ) という副詞的接頭辞が強調しているように声を立てた笑い、日本語でゲラゲラというような笑いだ。と解説はしてみたものの、そのことはなによりも μείδησεν (meidēsēn) と ἐγέλασσε (egelasse)、それぞれの音が端的に物語っている。

さて、第6歌のヘクトールとアンドロマケーの別れには、後者の笑いにかかわって聞き落とすことのできないもう一つの詩句がある。上の471行目に続いて、

ヘクトールは兜を脱いで子を抱きことばをかけて母親に返す。母はそれをかぐわしい胸に受け取る……

「涙にくれて笑いながら、夫はそれを見て憐れみ」(6-484)

δακρύνει γελάσασα: πόσις δ' ἔλεησε νοήσας,

δακρύνει γελάσασα (dakryuoen gelasása 涙にくれて笑いながら)、この音からは嗚咽と入り混じった笑い、泣顔と一緒にあった笑顔が浮かぶ。

ところで『イーリアス』にはもう一つの笑いがある。それが不思議なことに、上のヘクトールとアンドロマケーの別れに引き続く場面で出てくる。パリスの戦場に赴く様を描写するくだりである。

「(パリスは) 武具で日輪の如く輝きつつ進んだ

高らかに笑いながら。速い足が彼を運ぶと、たちまち」(6-513～514)

τεύχεσι παμφαίνων ὡς τ' ἠλέκτωρ ἐβεβήκει

καρχαλόων, ταχέες δὲ πόδες φέρον: αἴψα δ' ἔπειτα

καρχαλόων (kankhaloôn 高らかに笑いながら)、これもずばりオノマトペだ。この語は、この場面のように意気揚々と戦いに赴く時や戦果に誇る時の勇士の笑いだから、日本語ならさしずめ「カンラカラカラ」だろう。

このように第6歌終盤は人間の種々の笑いが響いている。

「鎧と兜と槍を突き立てて」(7-62)

ἀσπίσι καὶ κορυθῆσσι καὶ ἔγχεσι πεφρικυῖαι

i 音が戦場に突き出た無数の尖がりを表している。

「罌粟の如くに頭は片方がかっかり垂れた、それは庭で  
種子と春雨で重くなって(垂れる)、

そのように頭は兜に重くされて片方に傾いだ」(8-306～8)

μήκων δ' ὡς ἐτέρωσε κάρη βάλεν, ἢ τ' ἐνὶ κήπῳ

καρπῷ βριθομένη νοτιήσιν τε εἰαρινῆσιν,

ὡς ἐτέρωσ' ἤμυσε κάρη πῆληκι βαρυνθέν.

長音の η (ê) と ω (ô) が平和の極みともいうべき情景を殺戮のシーンの痛切な比喩に歌いあげている。加えて、ここでも三つの b 音、βάλεν (balen がっかり垂れた)、βριθομένη (brithomenê 重くなって)、βαρυνθέν (baryunthen 重くされて) がいずれも非情な力を表しているのを聴くことができる。

「涙を流しながら彼は立った、黒い水の泉の如くに

(その泉は) 切り立った岩から黒ずんだ水を注ぐ」(9-14～15)

ἴστατο δάκρυ χέων ὡς τε κρήνη μελάνυδρος



ἦ τε κατ' αἰγίλιπος πέτρης δνοφερόν χέει ὕδωρ:

四つのδ+ρ (d+r) があるが、最初のそれはアガメムノンのδάκρυ (dakryu 涙) そのものであり、後の三つはその変奏としてとめどなく湧き起こるどす黒い苦悩を象徴しているようだ。

「喜びそうな贈り物と穏やかな言葉でもって (宥められないかと)」(9-113)

δώροισίν τ' ἀγανοῖσιν ἔπεσσί τε μειλίχοισι.

si の音には、先にあげたσιωπή (siôpê 静かに) やσίγα (sîgâ 黙りなさい) に見るように、丁度日本語でいう「鎮める」や「静める」のsiにあたる音感があるようだ。何とかしてアキレウスの怒りを宥められないものかと思慮をめぐらすネストールのの気持ちが籠った一行だ。

「臥所に上ったこともなければ交わったこともない」(9-133)

μή ποτε τῆς εὐνῆς ἐπιβήμεναι ἤδ' ἐ μιγῆναι,

ε は女性形冠詞、形容詞そして女性名詞によく現れる音でもあり、これが繰り返されるのは優美なもの、愛にかかわることを語る詩行に多い。この詩行は否定詞μή (mê) で愛の行為を否定しているわけだが、否定しつつ、同時に実はその欲望が抗し難いものであることを示しているようだ。

オデュッセウスがアキレウスに戦列復帰を促すことばの中にこういうくだりがある。

「あなた自身の後々苦しみをもつことになる、そして  
起こった禍に救いを見つかる手立てはなくなる、そうなる前に」  
(9-249~250)

αὐτῷ τοι μετόπισθ' ἄχος ἔσσεται, οὐδέ τι μῆχος  
ρέχθέντος κακοῦ ἔστ' ἄκος εὐρεῖν: ἀλλὰ πολὺ πρὶν

ἄχος (akhos 苦しみ) と ἄκος (akos 救い) を相並ぶ詩行の同位置に置いて強調し、アキレウスの心を動かそうとする。弁舌家オデュッセウスの修辞がうかがえる。

それに答えたアキレウスの拒絶のことばの中の一節。自分が得た女がアガメムノンにより権力に任せて奪い取られた恥辱を語って、ことばは怒りに満ちている。

「奪い取って、心から愛する妻を我がものとしている、その女と寝て  
楽しむがいい、何故にトロイア勢と戦わねばならないのか  
アカイア勢は、何故に兵を集めてここまで引き連れてきたのか  
アトレウスの子は、髪麗しきヘレネーの故ではないのか」(9-336~9)  
εἶλετ', ἔχει δ' ἄλοχον θυμαρέα: τῆ παριαύων

τερπέσθω. τί δὲ δεῖ πολεμιζέμεναι Τρώεσσι  
Ἀργείους; τί δὲ λαὸν ἀνήγαγεν ἐνθάδ' ἀγείρας  
Ἀτρείδης; ἢ οὐχ' Ἑλένης ἕνεκ' ἠϋκόμοιο;

激情からいずれの詩行も次行冒頭に跨っている。中でも Ἀργείους (argeiús アカイア勢) と Ἀτρείδης (at্রেidês アトレウスの子) は類似音で対比し、「何故アトレウスの子 (= アガ멤ノンあるいはメネラオス) だけのために」との憤慨が伝わってくる。

さらに τί δὲ (ti de 何故に) の両詩行詩律上同位置での繰り返し、こちら辺オデュッセウスたち和解使節一行は (そしてホメロスの聴衆は)、あるいは前のオデュッセウスの修辞 (9-249-250) に対する痛烈な反撃を聞き取ったかもしれない。

「(地面に突き刺さった槍を目の前にして) ぶるぶると震えて、口には歯の  
がたがたという音が起こった」(10-375)

βαμβαινῶν: ἄραβος δὲ διὰ στόμα γίγνεται ὀδόντων:

βαμβαινῶν (bambainôn) はここだけに出る語で語義は明確ではないが、膝か、歯かいずれにせよ身体が震える様を表現していることは語の音からも明らかだ。この詩行 bbbddggd と濁音が鳴り響いている。

「(首を切り落とせば) 男の頭は声を発しながら砂塵にまみれた」(10-457)

φθειρομένον δ' ἄρα τοῦ γε κάρη κονίησιν ἐμίχθη.

前半の ου (û)、後半の η (ê)、いずれも断末魔の呻き声のようだ。そして、「呻き」が umeki であるのは偶然だろうか。

「彼らは戦い、いずれの側もおぞましい敗走を思わなかった」(11-71)

δήρουν, οὐδ' ἕτεροι μνώοντ' ὀλοοῖο φόβοιο.

û 音と o、ô 音、戦闘のおぞましくも重苦しい一行だ。

「敗走するトロイア勢の (頭が落ちた)、たくさんの首太き馬達は  
戦場をガラガラと空の車を引いた

非の打ちどころのない御者を恋いながら。御者達は地面に  
横たわっていた、奥方により禿鷹に愛しい姿で」(11-159~162)

Τρώων φευγόντων, πολλοὶ δ' ἐριαύχενες ἵπποι  
κείν' ὄχεα κροτάλιζον ἀνὰ πτολέμοιο γεφύρας  
ἠνιόχους ποθέοντες ἀμύμονας: οἳ δ' ἐπὶ γαίῃ  
κείατο, γύπεσσι πολὺ φίλτεροι ἢ ἀλόχοισιν.

喉音の g, k, kh、これらは死せるもののふ達の周りでうつつろに響く音響だろう。

「兜の頂を（撃った）、青銅は青銅にはじかれ  
美しい肌には届かなかった、兜が防いだのだ」（11-351～2）

ἀκρην κὰκ κόρουθα: πλάγχθη δ' ἀπὸ χαλκόφι χαλκός,  
οὐδ' ἔκετο χροά καλόν: ἐρύκακε γὰρ τρυφάλεια

k と kh から青銅と青銅がぶつかり合う音が聞こえる。呉訳では青銅に「かね」とルビを振っている。そう振る気持ちはよくわかる。

「（猪は）曲がった顎のところで白い牙を研ぎながら」（11-416）

θήγων λευκὸν ὀδόντα μετὰ γναμπτήσι γένυσσιν

g 音はまさしく研ぐ音だろう。この詩行、訳してみると不思議なことに原詩の g 音を含みずれの語も g 音を含む日本語になった。θήγων (thêgôn 研ぐ)、γναμπτήσι (gnamptêsi 曲がった)、γένυσσιν (genyussin 顎)。特に意図せず自然にそうになったのだが。深いところで諸言語の枠を超えた音の共通性が脈打っているのかもしれない。諸言語の源が一つである可能性が想像させられる。

弁舌家ネストールが昔の我が武勲を語る一節。

「男どもはわしの槍に討ち取られて地面を歯で噛んだのだ」（11-749）

φῶτες ὀδᾶξ ἔλον οὐδας ἐμῷ ὑπὸ δουρὶ δαμέντες.

この d 音の繰り返しには、地面を噛んだときの無機質の歯ごたえを感じさせる気味がある。

自慢話は更に続く。

「小麦豊かなブーブラシオンへとわし等が馬を進めた間」（11-756）

ὄφρ' ἐπὶ Βουπρασίου πολυπύρου βήσαμεν ἵππους

唇音 (ph, p, b) のオンパレード。口調のよさを楽しんでいる。ネストールの得意な表情が浮かぶ。

「その突進する所はどこでも軍勢が退いた」（12-48）

ὄπη τ' ἰθύση τῆ εἰκοσι στίχες ἀνδρῶν:

i 音は鋭いものを指すことが多いが、ここではその変奏で突進を表現している。

「大きな根をしっかりとはりめぐらせて」（12-134）

ρίζησιν μεγάλῃσι διηνεκέεσσ' ἀραρυῖαι:

長音はどの母音でも大きなもの表すことが多いようだが、ここの η (ê) も生命力のある大きなものを感じさせる。

「トロイア人達はのたうちまわる蛇を見て震えあがった」（12-208）

Τρώες δ' ἐρρίγησαν ὅπως ἴδον αἰόλον ὄφιν

この ὄφιν (ophin 蛇) の発音については古来興味深い議論がなされている。本来詩律上この語頭の *ο* の位置には長音がなくてはならない。しかるに ὄφιν の *ο* は短音である。そこでこの短縮について「蛇のしっぽの短い様だ」あるいは「恐怖でトロイア勢の縮みあがった様だ」とする解釈、その変奏で「聴衆にトロイア勢の味わった恐怖感を与えるべく敢えて韻律を破った」とする解釈、一方、発音自体を「*ôphin*」あるいは「*opphin*」と異例ではあるが長音化したのではないかという解釈などがある<sup>(註1)</sup>。

筆者は「*ôphin*」説をとりたい。

日本でも俳句においては通常 *ο* とすべきを *ô* と発音させる場合がある。例えば、「牡丹の百のゆるるは湯のやうに 澄雄」では *botan* ではなく *bôtan* と発音する。初句の字足らずを避けるということもあるが、それ以上に句の駘蕩とした雰囲気からしてここは *bôtan* でなくてはならない。

問題の ὄφιν についても、詩行の驚愕、恐怖の雰囲気からして *ô* (*ô*) という（発声されようとしてされない）感嘆詞にひかれて *ôphin* となるのはありうることだと思われるのである。

あるいはホメーロスは時と場に応じて歌い分けたのかもしれない。吟唱者の感性と技量が試される一節である。

「果樹園や小麦の稔る畑の美しい（領地）を」(12-314)

καλὸν φυταλιῆς καὶ ἀρούρης πυροφόροιο;

kálon phûtaliês kai arûrês pûrophoroio

なだらかな流音 (*l*, *r*) による長閑で豊かな田園風景の描出。うっとりするような音調だ。

ところで、この詩行に限らず主調音と意味の交響、これが詩人の意図的技巧だったのか偶然の産物なのか、これまでも議論になってきたようだ<sup>(註2)</sup>。この問題についてここで少し考えてみたい。

まず上記引用の詩行 (12-314) だが、こういう詩行をみるとホメーロスの詩の暢達さがよくわかる。どこにも巧んだところが感じられない。では偶然のなせる技だったのか。

もうひとつ、先に引用した次の詩行はどうか。

「真っ先にカルカスを悪意を含んで睨みつけつつ (アガメムノン) は言った」  
(1-105)

Κάλχαντα πρῶτιστα κάκ' ὀσσομένοσ προσέειπε

カ行音による憎々しげな表情を喚起する効果、これは詩人の意図したものだったのか否か。カルカスはアカイア勢第一の占師であったようだからこの場で登場するのは極めて自然、他の者はむしろ考えられない。したがって *Κάλχαντα*

(kalkhanta カルカス) と k 音を含んだその名が出てくることは成り行き上当然であり詩人の意図的選択ではないように見える。また、κάκ' (kak 悪を含んで) の k 音も元々そのギリシア語が纏っていた音であり詩人の創造というわけではない。

とすると、これらの措辞は偶然であり詩人の創造ではないということになりかねないが、果たしてそうっていいものだろうか。偶然か意図的かはそう截然と分けられるものだろうか。分けることに意味があるのだろうか。

そもそも詩作において何をもって偶然といい意図的というのか考えてみる必要がある。詩人の作詩は設計図をもとに家を建てるのとは違う。詩人の頭の中に歌われるべきものが出来上がっていてそれを言葉に移していくのではない。詩人は詩の萌芽のようなもの、それは詩想ともいえようが、それを言葉の海の中に放つ。言葉は、詩想に触発され誘引され詩想を核として集い、言葉の海に内在する文法と詩律にのっとって詩句を結晶させていく。言葉が言葉を呼ぶこともあり音が音を呼ぶこともある。Κάλχαντα にしろ κάκ' にしろ、そしてその前に引用した詩行の流音にしろ、そのようにして集まってきた言葉であり音だ。

そのように、詩行にどのような音もたらされるかは偶然によるものというよりむしろ詩的必然によるというべきだろう。ホメーロスなら詩的必然のかわりに女神ムーサイのはからいというかもしれない。そして最後にその詩行をよしとするのは無論詩人だが、それは詩人の意図というより詩心の無意識的働きだろう。これもホメーロスなら女神ムーサイの働きだということだろう。

ゼウスがトロイアの戦場から目を離して、遠くの地を眺めやる場面はこう歌われる。

「遥かに、馬を飼うトラキア人の地を見おろしながら、  
また、接近戦得意のミューシア人、馬乳飲む誇り高きヒッペーモルゴイ人、  
最も正義を守るアビオイ人の（地を見おろしながら）」(13-4~6)  
νόσφιν ἐφ' ἵπποπόλων Ἑλλήνων καθορώμενος αἶαν  
Μυσῶν τ' ἀγχεμάχων καὶ ἀγαυῶν ἱππημολγῶν  
γλακτοφάγων Ἀβίων τε δικαιοτάτων ἀνθρώπων.

ω(δ)音は遥かなるもの、広大なものを思わせる。ある詩人の詩に「オーリーオーン 全部長音だ オリオンではこの雄大な感じは出ない」という一節がある(註3)。ここでもゼウスはオリュンポスの高みから今でいう地中海沿岸から黒海周辺の地まで遥かに神ならではの広大な眼差しを送っていたのだろう。

ポセイダーオーン神は大地の上を次のように進む。

「三度足を伸ばして進み、四歩目には目的地に着いた」(13-20)  
τρὶς μὲν ὀρέξαι ἰών, τὸ δὲ τέτρατον ἴκετο τέκμων

t 音は神の歩みの速やかさだ。

そして、海の上を馬車に乗り進む様はこう表現される。

「喜びで海は路を開き、(馬たちは)翔けた」(13-29)

γηθοσύνη δὲ θάλασσα δίσιτατο: τοί δὲ πέτοντο  
齒音 (t, th 音と d 音) は速やかさとともに心の弾みを感じさせる。

「指揮官の無能と兵士達の怠慢のせい」(13-108)

ἡγεμόνος κακότητι μεθημοσύνησί τελαών,

格言的口調。それがどのように成就しているのかみてみると、ê 音 (η) の繰り返し、ti と si の対応、指揮官 ἡγεμόνος・無能 κακότητι+ 怠慢 μεθημοσύνησι・兵士達 λαών という交差的詩行構成などだろうか。

「まっしぐらに勢い込んで (ヘクトールは先頭を切った)、岩から転げる落石のように、

それは崖のふちから冬の川が押し転がす石だ

おびたしい水で頑固な岩の根元を壊して。

高く跳ね跳びながら落下し、その下で森は轟く、

石はただ一閃に駆ける、最後に平地につくまで、

その時には逸っても転がることはない」(13-137~142)

ἀντικρὸ μεμαώς, ὀλοίτροχος ὡς ἀπὸ πέτρης,

ὄν τε κατὰ στεφάνης ποταμὸς χειμάρροος ὥση

ῥήξας ἀσπέτω ὄμβρω ἀναιδέος ἔχματα πέτρης:

ὑψι δ' ἀναθρώσκων πέτεται, κτυπέει δὲ θ' ὑπ' αὐτοῦ

ὑλη: ὁ δ' ἀσφαλέως θέει ἔμπεδον, είος ἴκηται

ἰσὸπεδον, τότε δ' οὐτι κυλίνδεται ἐσσύμενὸς περ:

ここでは t, th 音と p, ph, ps 音によって石の勢い猛に跳ね跳ぶ様を表している。最終行行末の περ (per) の語感 は石が止まる瞬間の最後の微動を彷彿させる。

「プリアモスの子が釣り合いのとれた楯を持って (進み出た)

足取り軽く楯に身を隠しつつ前に歩みながら」(13-157~8)

Πριαμίδης, πρόσθεν δ' ἔχεν ἀσπίδα πάντοσ' εἶσην

κούφα ποσί προβιβάς καὶ ὑπασπίδια προποδίζων.

ここの p, ph 音は歩を進める音だ。ποσί (posi 足) の語が核となってこれだけの p 音の語が集まり二つの詩行に結晶している。

ところで日本語の一步も ippo だしフランス語の歩みも pa だ。これは足音か

らきているのだろうか。足音は人間の身体が出す音で最も基本的なものの一つだ。

「・・・目を眩ました

輝き放つ兜からの青銅の光が

磨かれたばかりの鎧からの、燦然たる楯からの（光が）

どっと押し寄せる軍勢の（武具の光が）・・・」（13-340～3）

・・・ : ὄσσε δ' ἄμερδεν

αὐγὴ χαλκείη κορύθων ἀπο λαμπομενάων

θωρήκων τε νεοσμήκτων σακέων τε φαεινῶν

ἐρχομένων ἄμυδις: . . .

長音の ê と ôn. ê は目を射る光線、ôn は眩暈のようだ。

「その彼女を父親と母君が心にかけて慈しんだ」（13-430）

τὴν περὶ κῆρι φίλησε πατῆρ καὶ πότνια μήτηρ

愛情の ê 音だ。

「のびて横たわった、黒い血が流れ出で大地をぬらした」（13-655）

κεῖτο ταθείς: ἐκ δ' αἶμα μέλαν ῥέε, δεῦε δὲ γαίαν.

なぜか印象的な詩行がある。語られていることがそれほど詩的というわけでもなく、表現にも一見目立ったところがないのにだ。この詩行もそうだ。しかるにあらためて音に着目してみるとそこに特徴があることに気付く。母音のほとんどが a 音と e 音である。おそらくは a、e 音の効果が鮮血の印象を深めるのに与っているのだろう。

「(突風は) 恐ろしい轟音とともに海に交じる。するとそこに沢山の

鳴り響く海の泡を吹く波が

うねる白い波頭を上げる（波が）あちらにもこちらにも（起こる）」

(13-797～9)

θεσπεσίω δ' ὁμάδω ἀλλὶ μίσγεται, ἐν δέ τε πολλὰ

κύματα παφλάζοντα πολυφλοίσβοιο θαλάσσης

κυρτὰ φαληριῶντα, πρὸ μὲν τ' ἄλλ', αὐτὰρ ἐπ' ἄλλα:

この三行、λ (L) のラ行音が主調低音となって響いている。散りばめられた l 音は「あちらにもこちらにも」起こる波のようだ。共感覚というものがある。ある色に味を感じたり、ある音に色を感じたりといった感性横断的知覚のことだ。l 音が波を想起させるのはその一種かもしれない。

「あなたが治めているアルゴス人の数ほど、それほど」（14-94）

τοσσοῖδ' ὄσσοισιν σὺ μετ' Ἀργείοισιν ἀνάσσεις:

この詩行はs音が極めて多い。だいたいs音はギリシア・ローマ以来 cacophony (耳障りな音調) の最たるものとされ評判が悪い。前1世紀の修辞家ディオニュシオスは「s音は優美さに欠け不快である」とし「s音は理性を持たない野蛮の声に思える」とさえ言っている。さらに、それ故s音を使わないで作詩した詩人もいたと伝えている(註4)。

ところが詩人はその音調の性質を逆用することもできる。ここにおいても、オデュッセウスがアガメムノンの弱気を諷めるくだりであるので、その論難の調子をs音を以て表現しているように思える。

もっとも euphony (快い音調) と cacophony (耳障りな音調) の別にしろ、その他音調の帯びる意味合いにしろ、常に文脈や前後の音によるのであり、不動絶対のものではない。このs音についても上記の不快や非難の調子以外にいろいろな場合がある。

例えば第1歌(1-480行以下)には航行の速やかさを感じさせる詩行があった。同様にプラトンはソクラテスをして「ある有名なラコニア男子で Σοος (Soos) という名前の人がいた。それというのもラケダイモン人は、素早い動きをこの名前で呼んでいるわけだ」と言わしめている(註5)。

また、第9歌(113行)には鎮めの効果を感じさせる詩行があった。σιωπή (siôpê 静かに) のs音もその場合と同じ働きをしていると思われる。

こら辺の事情はこういうことではなからうか。即ち、それぞれの音には複数の意味合いが可能性として内在している。その音が文脈や前後の音の中に配置されることによって、内在していた可能性の内のしかるべき意味合いが引き出されその音の帯びるところとなる。そしてこの配置を差配するのが無意識的詩心でありムーサイである、と。

「ハーレーが愛の交わりへことば巧みに誘われました」(14-360)

Ἥρη δ' ἐν φιλότῃτι παρήπαφεν εὐνηθήναι.

こも愛にかかわる ê音だ。

「その如くに豪勇のヘクトールはたちまち地面の砂塵の中に倒れ

手から槍を落とすと、彼の上に楯と

兜は落ち、周りに青銅で飾られた武具がカラカラ鳴った」(14-418~420)

ὡς ἔπεσ' Ἐκτορος ὄκα χαμαὶ μένος ἐν κονίῃσι:

χειρὸς δ' ἔκβαλεν ἔγχος, ἐπ' αὐτῷ δ' ἀσπίς ἐάφθη

καὶ κόρυς, ἀμφὶ δὲ οἱ βράχχε τεύχεα ποικίλα χαλκῷ.

k, kh音は落下して地面に当たる音、あるいは武具同士がぶつかり合う音だ。



「羊を沢山持つポルバースの息子を（討った）。この人（ポルバース）をヘルメースはトロイア人たちの中で愛し財を授けた。その人に母親がイーリオネウスを一人っ子として産んだ。そのイーリオネウスの眉の下、目の付け根を突くと槍は目玉を抉り出しずっぷりと目とうなじを刺し貫いた。男は両手を突いて、崩れ落ちる。ペーネレオースは鋭い剣を抜き首筋の真ん中に斬りつけ、地べたに頭を兜とともにたたき落とした。依然として頑丈な槍は目に刺さったままだ。彼は雛罌粟の実さながらに捧げ持ちトロイア勢に示し勝ち誇って言った」（14-490～500）

υῖὸν Φόρβαντος πολυμήλου, τὸν ῥα μάλιστα  
 Ἑρμείας Τρώων ἐφίλει καὶ κτήσιν ὄπασσε:  
 τῷ δ' ἄρ' ὑπὸ μήτηρ μούνον τέκεν Ἴλιονῆα.  
 τὸν τόθ' ὑπ' ὀφρύος οὔτα κατ' ὀφθαλμοῖο θέμεθλα,  
 ἐκ δ' ὥσε γλήνην: δόρυ δ' ὀφθαλμοῖο διὰ πρὸ  
 καὶ διὰ ἰνίου ἦλθεν, ὃ δ' ἔζετο χεῖρε πετάσσας  
 ἄμφω: Πηνέλεως δὲ ἐρυσσάμενος ξίφος ὄξυ  
 αὐχένα μέσσον ἔλασσεν, ἀπήραξεν δὲ χαμᾶζε  
 αὐτῇ σὺν πήληκι κάρη: ἔτι δ' ὄβριμον ἐγγος  
 ἦεν ἐν ὀφθαλμῷ: ὃ δὲ φῆ κώδειαν ἀνασχῶν  
 πέφραδὲ τε Τρώεσσι καὶ εὐχόμενος ἔπος ἠύδα:

この一節のライトモチーフは「目」であり同時に目の語（ὀφθαλμος）に含まれている φ（ph）音だ。φが目を象徴している。そして499行目の φῆ（phê さながらに）は、茎の上の雛罌粟さながらの、槍（ἔ）で眼窩（ph）を刺し貫かれた首級のような。

「メゲースがそいつの馬毛飾りのついた青銅造りの兜の頭頂の突端を鋭い槍で突いた」（15-535）

τοῦ δὲ Μέγης κόρυθος χαλκῆρεος ἵπποδασειῆς  
 κύμβαχον ἀκρότατον νύξ' ἐγγεῖ ὄξυόνετι,  
 カ行音（k、kh、ks）は青銅同士ぶつかり合う音だ。

「あかかも、赤茶けた鷺が翼持つ鳥の類が河畔で餌を啄ばむところに襲いかかる如く、（それは）雁や鶴や首長い鶺鴒の（類だ）」（15-690～692）  
 ἀλλ' ὥς τ' ὀρνίθων πετεηνῶν αἰετὸς αἰθῶν

ἔθνος ἐφορμάται ποταμὸν πέρα βοσκομενάων  
χηνῶν ἢ γεράνων ἢ κύκνων δουλιχοδείρων,

ω (ὦ) は広大な感を与える。こども広々とした河畔で鳥の類が何百羽何千羽と群をなしている情景だ。

最後の行の χ, γ, κ (kh, g, k) は鳥の鳴き声であり、襲われて散々鳴き叫ぶ様だ。そして、χηνῶν (khênôn 雁)、γεράνων (geranôn 鶴)、κύκνων (kyukunôn 鶺鴒) と、それぞれの鳥の名に χ, γ, κ の音が含まれているのも、鳴き声とつながりがあるのだろう。

ところで、ここに出てきたホメロスギリシア語の χήν (khên: 上記 χηνῶν の単数主格) が実は漢語の雁 (ngan) と繋がっており、更に日本の古語とされるカキはそれに繋がっているのではないかとの指摘がなされている<sup>(註6)</sup>。従来の語族の枠を越えた人類共通祖語の存在可能性は決して夢想ではない。

「黒革を巻いた柄拵えの美しい剣が沢山  
戦う男たちの、あるいは手から地面に落ち、あるいは  
肩から落ちた。して黒い大地は血で流れた」(15-713~715)

πολλὰ δὲ φάσγανα καλὰ μελάνδετα κωπήεντα  
ἄλλα μὲν ἐκ χειρῶν χαμάδις πέσον, ἄλλα δ' ἀπ' ὤμων  
ἀνδρῶν μαρναμένων: ῥέε δ' αἷματι γαῖα μέλαινα.

ここでも a 音が鮮やかな血を想起させている。

そして三行目では流音(r,l)と鼻音(m,n)が流れる血に塗れた様を彷彿させる。

アイアスが手に持つ槍の穂先が切り離された様はこう描写される。

「手に空しく揮うは柄ばかり、彼から遠く  
青銅の穂先は地面に落ち響きをたてた」(16-117~8)  
πῆλ' αὐτως ἐν χειρὶ κόλον δόρυ, τῆλε δ' ἀπ' αὐτοῦ  
αἰχμὴ χαλκείη χαμάδις βρόμβησε πεσοῦσα.

ê, û の長音からは、穂先の切り離されて地面に落ちるまでの軌跡がスローモーションのように浮かび上がる。

また三行目、前半の kh 音は二つの堅い物自体(青銅の穂先と地面)、後半の b, p 音はその二つの物体がぶつかり合う音を思わせる。

獲物を喰らった後、狼共は水辺に急ぐ。

「薄い舌で黒い水を舐めようと」(16-161)

λάψοντες γλώσσησιν ἀραιῆσιν μέλαν ὕδωρ

流音の l, r からは、恐らくはまだ血にまみれているであろう舌をひらひらさせて水面を舐める様が浮かぶ。

「すべての頂、突端そして谷間まで

露わとなつて、涯知らぬ大気が天空から裂けた」(16-299~300)

ἐκ τ' ἔφανεον πᾶσαι σκοπιαὶ καὶ πρῶνες ἄκροι

καὶ νάπαι, οὐρανὸθεν δ' ἄρ' ὑπερράγη ἄσπετος αἰθήρ,

この二行の ph、p 音からは光と現れと晴朗さが感じられる。

「突くと、青銅の槍はまっすぐに脳の下を

刺し貫き、白い骨を砕いた、

そして歯は抉りだされた。両方の目には

血が充満した。その血を口から鼻から

大口を開けて吹き出し、死の黒い雲が覆った」(16-346~350)

νύξε: τὸ δ' ἀντικρὺ δόρυ χάλκεον ἐξέπέρησε

νέρθεν ὑπ' ἐγκεφάλιοιο, κέασσε δ' ἄρ' ὀστέα λευκά:

ἐκ δ' ἐπίναχθεν ὀδόντες, ἐχέπλησθευ δέ οἱ ἄμφω

αἵματος ὀφθαλμοί: τὸ δ' ἀγὰ στόμα καὶ κατὰ ῥίνας

πρήσε χαχῶχ: θανάτου δὲ μέλαν νέφος ἀμφεκάλυψεν.

この一節には主調音が三つ含まれている。

まず1行目から2行目前半にかけて喉音(k, kh, ks)が主調をなしており、これは破壊だろう。

次いで2行目後半から3行目前半にかけては歯音(d, t, th)であり、骨の堅さだろう。

最後に3行目後半から5行目前半にかけては流音(l, r)そして鼻音(n, m)であり、溢れ出る血だ。

「逞しい腿の脇から長刃の剣を引き抜くなり」(16-473)

σπασσάμενος τανύηκες ἄορ παχέος παρὰ μηροῦ

「σπασσάμενος (spassamenosu 引き抜くなり)」、παχέος (pakheosu 逞しい)」そしてそれらの語も含めた p 音の反復からは、剣を素早く引き抜く手際が見えるようだ。日本語でも「スパッと」という。

「あたかも、樵たちの(伐採の)響きが起こる

山の谷間で、遠くからでもその音が聞こえる(その如く)」(16-633~634)

τῶν δ' ὡς τε δρυτόμων ἀνδρῶν ὀρυμαγδὸς ὀρώρει

οὐρεὸς ἐν βήσσης, ἔκαθεν δέ τε γίγνεται ἀκουή,

1行目の d 音と o、ô 音、これは伐採現場の音、2行目の e、he、ê 音は遠くで聞くその響きだろう。

「速やかなる送り手をつけ彼（の死体）を運んでいかせろ」（16-671）

πέμπε δέ μιν πομπῶσιν ἄμα κραιπνοῖσι φέρεσθαι

p、ph 音は素早さだ。

「木々は互いに長い枝をぶつけ合う

恐ろしい響きで、（枝の）折れる音（が起こる）」（16-768～9）

αἶ τε πρὸς ἀλλήλας ἔβαλον τανυήκεας ὄζους

ἤχη θεσπεσίη, πάταγος δέ τε ἀγνυμενάων,

ἤχη（éké響きで）、πάταγος（patagos 音）そして ἀγνυμενάων（agnyumenáōn 折れる）、いずれも既に擬音的な語例として挙げたところだが、音のありようをありありと喚起している。769 行目は詩篇の中でもオノマトベ的ギリシア語の使い手ホメーロスの特徴が凝縮した一行だ。

倒される若武者はこう若木に喩えられる。

「さながら、人がオリーブの豊かな若木を

人気のない水の沢山湧く土地で育てる、

美しくすすくと。それをそよぎが揺らす

四方からの風の、すると白い花を咲かせる。

そこに突然激しい嵐が襲い、強風は

根こそぎにし地面に横たわらせる」（17-53～58）

οἶον δὲ τρέφει ἔρνος ἀνὴρ ἐριθηλὲς ἐλαίης

χώρῳ ἐν οἰοπόλῳ, ὅθ' ἄλις ἀναβέβροχεν ὕδωρ,

καλὸν τηλεθάον· τὸ δέ τε πνοιαὶ δογέουσι

παγτοίω ἀνέμων, καὶ τε βρύει ἀνθεῖ λευκῶ·

ἐλθὼν δ' ἐξαπίνης ἀνεμος σὺν λαίλαπι πολλῇ

βόθρου τ' ἐξέστρεψε καὶ ἐξετάνυσσ' ἐπὶ γαίῃ·

ここでも三段階に主調音が変化している。

1、2 行目では ἔρνος（ernos 若木）にも含まれる流音（r、l）であり、これは若さを歌っているようだ。

3、4 行目では πνοιαὶ（pnoiai そよぎ）にも含まれる鼻音（n、m）であり、牧歌的情景を奏でている。

5、6 行目では λαίλαπι（lailapi 嵐）に含まれる唇音（p 音）であり、突然襲う災難を思わせる。

ヘクトールはパトロクロスを倒し、その武具を奪う。それはパトロクロス出陣に際しアキレウスが貸し与えたものだった。そしてヘクトールは味方にこう呼び

かける。

「俺が非のうちどころなきアキレウスの武具をつけるまでの間(勇敢であれ)、  
豪勇のバトロクロスを倒して剥ぎ取った美しい(武具を)」(17-186~187)

ὄφρ' ἄν ἐγὼν Ἀχιλλῆος ἀμύμονος ἔντεα δύω  
καλά, τὰ Πατρόκλοιο βίην ἐνάριξα κατακτάς.

高く響く a 音は勝ち誇ったヘクトールの関の声のようだ。

アキレウスに僚友バトロクロスの死を知らせることばはこうだ。

「おお、気象烈しいペーレウスの子(アキレウス)よ、なんとも忌まわしい  
知らせを知ることになる、決して起こってはならなかったことを」

(18-18~19)

ὦ μοι Πηλῆος υἱὲ δαΐφρονος ἤ μάλα λυγρῆς  
πεύσσαι ἀγγελίης, ἢ μὴ ὠφέλλε γενέσθαι.

この e 音、ê 音は深い嘆きの声だ。

その悲報を聞いたアキレウスは、

「このように言うと、悲嘆の黒い雲が彼を覆った。

黒ずんだ灰を両手でつかむと

頭の上にかけて麗しい顔を汚した」(18-22-24)

ὡς φάτο, τὸν δ' ἄχεος νεφέλη ἐκάλυψε μέλαινα:  
ἀμφοτέρησι δὲ χερσίν ἐλὼν κόνιν αἰθαλόεσσαν  
χευάτο κὰκ κεφαλῆς, χαρίεν δ' ἤσχυνε πρόσωπον:

いたるところに配された kh 音と k 音が、ἄχεος (akheos 悲嘆) と κόνιν (konin 灰) に塗れたアキレウスの姿を描き出す。

「うつせみの人間どもの豊かな町を攻略して」(18-342)

πειράς πέρθοντε πόλεις μερόπων ἀνθρώπων.

前半三つの語の語頭が π、後半二つの語の語尾が πων、ここでは、詩人は π 音による音調のよさを楽しんでいるかのように見える。しかしこの詩行、悲嘆にくれている最中のアキレウスのことばである。あるいはこの音調は慨嘆の ὦ πόποι (ὄ ποποι おお、なんということだ) を裏に響かせているのかもしれない。

なお「うつせみの」と試訳した μερόπων は人間につく枕詞の形容詞で、「ことばを与えられた」とか「死すべき」とか推測されるが語義不詳。人間につく形容詞も数ある中で、この語は πων の音ゆえにここにあるのだろう。

「うつろな洞窟の中で、周りにはオーケアノースの流れが

泡でぶくぶく音を立てながら果てしなく流れていた、誰も(知ることは)

なく」(18-402~3)

ἐν σπηΐ γλαφυρῶ: περὶ δὲ ῥόος ἸΩκεανοῖο  
ἀφρῶ μορμύρων ῥέεν ἄσπετος: οὐδέ τις ἄλλος

p、ph 音と流音の r、水泡と流れに囲まれた水中の洞窟の情景だ。

「水音騒ぐ川のほとり、風音そよぐ芦のあたり」(18-576)

παρ ποταμὸν κελάδοντα, παρὰ ῥοδανὸν δονακῆα.

これは『イーリアス』の中でも音調のよさで屈指の詩行だ。

一行全体に明るい a 音が響き渡っている。しかしそれだけではない。

par potamon keladonta, para rodanon donakêa

と繰り返してみると、適度に配された o 音や流音 (r、l) や鼻音 (m、n) が長閑な情趣を醸し、そしてそこに歯音 (t、d) が快い諧調を与えている。

さらに、特に高アクセントの付されている箇所 (keladonta の一つ目の a と donakêa の ê) にアクセントを置き誦してみると、自ら牧人か吟遊詩人になった気分さえ味わえる。

これらすべてがこの一行を極めつけの牧歌的詩行とするのに与っている。

「次いでことばが伝えられるやいなや、たちまち仕事は果たされた」

(19-242)

αὐτίκ' ἐπειθ' ἅμα μῦθος ἔην, τετέλεστο δὲ ἔργον:

歯音 (t、th、d) に現れているのはてきぱきとした進捗だ。

「揮うことを (他の者は出来なかった)、アキレウス一人がそれを揮う事が出来た

ペーリオン山のトネリコの槍を、それは彼の父親にケイローンがもたらしたもの

ペーリオンの頂きから、勇士たちを屠る武器として」(19-389~391)

πάλλειν, ἀλλὰ μιν οἷος ἐπίστατο πῆλαι Ἀχιλλεύς:

Πηλιάδα μελίην, τὴν πατρὶ φίλῳ πόρε Χείρων

Πηλίου ἐκ κορυφῆς φόνον ἔμμεναι ἠρώεσσιν:

繰り返される p 音と l 音、これは初めの πάλλειν (pallein 揮う) の変奏だ。さらに表には出ていないアキレウスの父の名 Pêleus のアナグラムであるかもしれない。

ソシュールは一時期古典詩のアナグラム研究に没頭し、ホメーロスについても二十数冊のノートを残していると伝えられている<sup>(註7)</sup>。そのノートは残念なことにいまだ公刊されていないのだが、果たしてこの部分には着目しているのだろう

か。

「おお何という事だ、驚くべきことを目に見るものだ」(20-344)

ὦ πρόποι ἤ μέγα θαῦμα τόδ' ὀφθαλμοῖσιν ὀρώμαι:

o、ô 音は驚きの声だろう。

「息も絶え絶えの彼を（闇が覆った）。次いでムーリオンの傍らに立って突いた

槍で耳を。そのまま刺し貫き他方の耳から出た

青銅の刃が。次いでアゲーノールの子エケクロスの

頭の真ん中を柄よき剣で斬りつけた。」(20-472~775)

θυμοῦ δευόμενον: ὁ δὲ Μούλιον οὔτα παραστάς

δουρὶ κατ' οὖς: εἴθαρ δὲ δι' οὐατος ἦλθ' ἑτέροιο

αιχμὴ χαλκείῃ: ὁ δ' Ἀγήνορος υἱὸν Ἐχέκλον

μέσσην κὰκ κεφαλὴν ξίφει ἤλασε κωπήεντι,

Μούλιον (Múlion ムーリオス) は οὖς (ús 耳) を δουρὶ (dûri 槍) で οὔτα (úta 突き) ぬかれる。Ἐχέκλον (Ekheklon エケクロス) は κεφαλὴν (kephalên 頭) を κωπήεντι (kôpêenti 東よき) ξίφει (ksiphei 剣) で斬りつけられる。名前の音が殺され方を運命づけているかのようだ。

河の神がアキレウスに襲いかかる。

「こう言うと逆巻き高く跳ねあがりアキレウスを襲った、

泡と血と死体といっしょくたにたぎって」(21-324~325)

ἦ, καὶ ἐπῶρτ' Ἀχιλῆϊ κυκῶμενος ὑψόσε θύων

μορμύρων ἀφρῶ τε καὶ αἵματι καὶ νεκύεσσι.

ô 音は河の神が水を大きく巻きあげて襲いかかる様だ。

「さながら、釜が沢山の火に責め立てられ内側で沸き立つ、

やわらかく育った豚の脂肉を溶かしながら

いたるところで煮え返り、下には乾いた薪が置かれている（そのように）」

(21-362~364)

ὡς δὲ λέβης ζεῖ ἔνδον ἐπειγόμενος πυρὶ πολλῶ

κυσίην μελδόμενος ἀπαλοτρεφέος σιάλοιο

πάγτοθευ ἀμβολάδην, ὑπὸ δὲ ξύλα κἀγκανα κεῖται,

このくだりも三つに基調となる音調が変化している。

1行目後半では「火 πυρὶ (puri)」を思わせる p 音であり、2行目から次行前半にかけては「溶ける μελδόμενος (meldomenos)」感じの流音 (l, r) と鼻音

(m、n)、そして3行目後半ではそれと対照的に「乾いた *κάγκανα* (kankana)」感じの k 音だ。

また、1行目にある *ζεί* (zei) は「沸騰する」という意味の語だが、こういう詩行に配置されると、そのオノマトペ的喚起力にあらためて気付かされる。

老王ブリアモスが、自らに迫る死の無残さに対比して、若者の戦場における死をこういう。

「戦で鋭い青銅で切り裂かれ殺され

横たわっても (相応しい)、死んでも見えるものすべてが美しいのだ」

(22-72-73)

*ἄρηϊ κταμένῳ δεδαϊγμένῳ ὀξείῃ χαλκῶ*

*κεῖσθαι: πάντα δὲ καλὰ θανόντι περ ὅτι φανήη:*

美しさを讃えてはいるのだがそこに悲痛な響きがある。それには呻きのように繰り返される i 音が与っている。

ところで *ω* や *η* に付されている「下書きの ι (イオタ)」はもともとは発音されていたものが古典期にはほとんど発音されなくなっていたと言われている。ホメロス時代がどうであったか画説あるようだが、この詩行を見ると発音すべきと思われる。この二行、イオタを発音するしないで響きに歴然とした差があるからだ。ただし詩律上 *ω* と *ω*、*ῆ* と *η* は同じ長さであるべきなので、その範囲で i 音を添えるように発音するのが良いようだ。

「為すことなく不名誉に討たれるのではなく

大きな一働きをして後世に名を残したいもの」(22-304~5)

*μη μὰν ἀσπουδι γε καὶ ἀκλειῶς ἀπολοίμην,*

*ἀλλὰ μέγα ῥέξας τι καὶ ἐσσομένοισι πυθέσθαι.*

*γε καὶ* (ge kai) と *τι καὶ* (ti kai)、対立する内容の二行のそれぞれ韻律上同位置に同音調の語が置かれ、何としてもと意気込んだ口調が感じられる。

同様の例が第9歌にもあった。(249~250行)

「切っ先は真っ直ぐに柔らかい首を貫いた。

しかし青銅で重い槍が喉笛を断つことはなかった」(22-327~8)

*ἀντικρὺ δ' ἀπαλοῖο δι' ἀυχένος ἤλυθ' ἀκωκῆ:*

*οὐδ' ἄρ' ἀπ' ἀσφάραγον μελίη τάμε χαλκοβάρεια,*

アキレウスがヘクトールを討つ場面。この後、瀕死のヘクトールは残る *ἀσφάραγον* (aspharagon 喉笛) で最後の言葉を発することとなる。反復される a 音は喘ぎつつの発声だろう。



そしてヘクトールの魂がその肉体を去る、

「彼の運命を嘆きつつ、雄々しさと若さを残して」(22-363)

ὄν πότμον γοόωσα λιποῦσ' ἀνδροτήτα καὶ ἥβην.

γοόωσα (goōōsa 嘆く) 自体がオノマトペ的だ。それに先立つ o 音が嘆きの声の露払いをしている。

後半の長音(ὄ, ἐ)は哀惜の念のように聞こえる。

夫ヘクトールを喪ったアンドロマケーはその遺体を思ってこういう。

「身をくねらす蛆虫共がくらくらうでしょう、犬共が飽いたあとで」(22-509)

αἰόλαι εὐλαῖ ἔδονται, ἐπεὶ κε κύνες κορέσωνται

ai 音は思わず目を覆いたくなるような嫌悪だ。ai の音を発しながら唇を歪め、顔をしかめ、身まで振っているアンドロマケーの姿が浮かんできそう。

パトロクロスの亡霊がアキレウスにこう言葉をかける。

「眠っているな、私のことを忘れてしまって、

私が生きている間は心にかけてくれたのに、死んでからは」(23-69~70)

εὐδεις, αὐτὰρ ἐμείο λελασμένος ἔπλευ Ἀχιλλεῦ.

οὐ μὲν μευ ζώντος ἀκήδεις, ἀλλὰ θανόντος;

この二行、恨めし気な亡霊ならではの震え気味の音調だ。特に eu が幽界からの声のように聞こえる。

アカイア人たちはパトロクロスを葬るべく薪を採りにと山に向かう、その一行の動きはこう描写される。

「どこまでも上へ、下へ、横へそして斜交いにと進んでいった。」(23-116)

πολλὰ δ' ἄναντα κάταντα páραντá τε δόχμια τ' ἤλθον:

ἄναντα κάταντα páραντá (ananta katanta paranta 上へ、下へ、横へ)、このリズムは、一行の足音であり荷車のころがる音だろう。そして一転音調の異なる δόχμια (dokhmia 斜交い) がその単調を破り、一行の動きに生気を与えている。

「俊足の馬に曳かれて(戦車は)走っていく、

車の轍の跡も後ろの細かい砂の中に深くは

つかなかった、彼らは(それほど)速く駆けつけたのだ」(23-504~6)

ἵπποις ὠκυπόδεσσιν ἐπέτρεχον: οὐδέ τι πολλή

γίγνεται ἐπισώτρων ἀρματροχίη κατόπισθεν

ἐν λεπτῇ κονίη: τῷ δὲ σπεύδοντε πετέεσθη.

葬送競技の馬車走のこの場面、p 音が表すのは馬(ἵπποις hippos)の躍動と

スピードだ。

「胸の（近くに機織竿がある如く）、その如くオデュッセウスは間近に迫って走った、そして後ろから」(23-763)

στήθεος: ὡς Ὀδυσσεὺς θέεν ἐγγύθεν, αὐτὰρ ὀπισθεν

「どうか女神よ、私の足によき神助を授けたまえ」(23-770)

κλυθι θεά, ἀγαθή μοι ἐπίρροθος ἐλθὲ ποδοῖν.

徒歩走のこの場面で、th 音は人の走る (θέεν theen) 音の共鳴のようだ。

「彼は苦難の種である色好みへと導いたかの女神を称えた」(24-30)

τήν δ' ἤνησ' ἣ οἱ πόρε μαχλοσύνην ἀλεγεινήν.

憧れや色ごとを喚起する ê 音だ。

ホメーロスの比喩は女神を釣の錘にすることも憚らない。

「かの女神は鉛の錘の如くに海底へと沈んでいった

(錘は擬餌の) 野に棲む牛の角に取り付けられて(沈んでゆく)」(24-80~1)

ἣ δὲ μολυβδαίνη ἰκέλη ἐς βυσσὸν ὄρουσεν,

ἣ τε κατ' ἀγραυλοιο βροῶς κέρασ ἐμβεβαυῖα

b 音の反復はブクブクと泡を立てながら沈んでいく様だろう。

「私をお試しですね、ご老人、雄々しいヘクトールのことをお尋ねになるとは」(24-390)

πειρᾶ ἐμεῖο γεραίε καὶ εἴρεαι Ἑκτορα δῖον.

老王プリアモスに対しての、神であることを隠して現れた人助けの神ヘルメイアースのこぼれである。

ei, ai の繰り返すには戯れ心と同時に若干のからかいのニュアンスがある。更には自らが Ἑρμείας (ヘルメイアース) であることを暗示している感もある。ここもアナグラム研究家ソシユールの見解を聞いてみたいところだ。

アンドロマケーは、夫ヘクトール亡き後残された息子の将来を悲観してこういう。

「(あなたも私に) ついてきて、そこで卑しい仕事をさせられるのです」(24-733)

ἔψεαι, ἔνθα κεν ἔργα ἀεικέα ἐργάζοιο

呻くような嘆きの e 音だ。

そして『イーリアス』最終行。

「そのように彼らは馬を駆るヘクトールの葬儀を営んだのであった」

(24-804)

ὡς οἱ γ' ἀμφίεπον τάφον Ἐκτορος ἵπποδάμοιο.

繰り返されるο音は遠ざかり行くホメーロスの声、最後のοιοはその笈のようだ。

## エピローグ

以上、詩行に特徴的な主調音とその詩行が担う意味との間に共鳴するものが聴き取れる箇所を挙げてみた。しかしこれはホメーロスの音の世界の一端にすぎない。一端というのはいくつかの意味でそうだ。

一つには、本稿は広義の擬音的な効果（いわゆる音象徴）の側面に焦点を当てたもののだが、ホメーロス詩の音の世界にはこれ以外にも多様な側面がある。古典ギリシア語特有の高低アクセントの抑揚が奏でる情趣もあるし、厳格な中にも自在な六脚詩律の運用が醸し出す雰囲気もある。

もう一つには、擬音的側面に限っても本稿で取り上げたのは主調音が目立つ分りやすい例だけだ。この詩篇には他にも、措辞が自然なだけにいざ取り出そうとしても把握は容易でない音のニュアンス、しかしながらホメーロスの歌の聴き手たちは瞬時に聴き取ったであろう音のニュアンス（そして我々もそれとは気付かないままに無意識的に感じているニュアンス）、それが沢山蔵されているに違いない。

更にもう一つ、本稿は一読者一聴き手としての印象を述べた事例集であり、分類や総合を加えていない。歴史や医学におけるいわば証言集、症例集にとどまっている。これらの事例に理論的、学問的な見地からの適切な考察が加えられるならば、音韻論や詩学にもなんらかの資するところがあるのではないかと思われる。

ホメーロスの音の世界は汲めども尽きせぬ深い泉であるようだ。

ホメーロスとその聴き手にとって『イーリアス』は音声であった。現代において『イーリアス』は先ず文字である。最後に、このホメーロス詩における音声と文字の意味について改めて考えてみたい。

プロローグで『イーリアス』第9歌の一節を引用した。ここで、似たような場面があったことが思い出される。それは第3歌、神の使いがヘレネーのところによってくるくだりである。折りしもヘレネーは機を織っている。

「彼女を広間に見つけた、彼女は大きな布地を織っていた

二幅の赤紫のを、そこにさまざまな苦難を織りこんでいた

馬を駆るトロイア勢と青銅の鎧のアカイア勢との間の（苦難を）、

それらの苦難は彼女故に軍神アレスのもとに彼らが蒙ったものであった」

(3-125-128)

自らが主人公である詩、それも自らが原因となった苦難を語る詩を自らの手で織り込む、これも運命を感じさせ、その運命と向き合う女の姿を感じさせられる名場面だ。

さて、アキレウスは声で詩を歌ったが、ヘレネーは機織りで詩を歌っている。ヘレネーが織った織物をわれわれは嘆賞することができない。ヘレネーやホメロス時代の女たちが織った石でも金属でもない織り物は完全に消滅し、その手触りは勿論、色も形も知りようがないからだ。織り物について、手触りも色も形も知らずに嘆賞したり論じたりしようとするのは土台無理な話だ。

それでは形だけ、織物の形状や図柄の輪郭だけがスケッチされて残されていたとして、手触りや色がわからない場合はどうだろうか。嘆賞することも論ずることも不可能ではなかろうが、手触りや色がわからない以上その深さにはおのずと限界があるだろう。

アキレウスが歌い、ホメロスが歌った詩についても、それと似たことにならないよう心しなければならぬ。歌われた詩にとって文字に記されたテキストは、もしそれが声に繋がるものでないならば、ヘレネーの織り物にとってのその形を写したスケッチと同様の位置にとどまる。詩から声を捨象することは織り物から手触りや色を奪うようなものなのだから。我々もアキレウスの僚友パトロクロスのように、まず詩篇の音に、ホメロスの声に耳を澄ますべきなのだろう。

ところではたして我々はホメロスの声にどれだけ近づくことができるのだろうか。

ホメロスの詩篇の口承の伝統は途絶えてすでに二千年を超える。今日は圧倒的な文字、黙読の世界であり、口承の文化は瀕死の状態にある。

しかしながら、幸いにして我々の手元に残されているスケッチは詩篇の（完全とはいえないまでも）かなり忠実なテキストである。しかもそれは表音文字だ。それは瀕死のヘクトールに残された「喉笛」（第22歌328行）のようなものだ。これをたよりにホメロスの声を聞くことは望みえないことではない、もし我々がそこに息を吹き込むならば。

註1：“The sound of greek” W. B. Stanford University of California Press p118

- 註 2 : “Sound-patterns in Homer” D. W. Packerd  
Transactions of the American Philological Association Vol.104 pp139-140
- 註 3 : 『天體の運動について』 満田郁夫
- 註 4 : 『文章構成法』 デイオニュシオス 第 14 章 20 節
- 註 5 : 『クラテュロス』 プラトン 412-b
- 註 6 : ブログ “Philologie d’Orient et d’Occident” 工藤進 No.29 ~ 32
- 註 7 : 『ソシユールのアナグラム』 スタロバンスキー 金澤忠信訳 水声社 p15

『イーリアス』の和訳については下記の諸家の訳を参考にさせていただきつつ拙訳を試みた。

呉茂一訳 平凡社ライブラリー版

松平千秋訳 岩波文庫版

ホメーロス輪讀會訳 明治学院大学言語文化研究所版

満田郁夫訳 『榎檀』 所載